

令和8年度入試

前期選抜試験入試問題

国語

[令和8年1月18日（日）実施]

〈注 意〉

- 1) 試験開始までこの冊子を開いてはいけません。
- 2) 答えは、すべて解答用紙に記入してください。
* 解答用紙の中にはさんであります。
- 3) 解答用紙には、受験番号のみを記入してください。
- 4) 試験時間は50分です。
- 5) この冊子を持ち帰ることはできません。
* 試験終了後に回収します。

昭和学院高等学校

一、次の【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】【文章Ⅲ】は池谷裕二『脳は意外とタフである』の文章である。それぞれの文章を読み、後の問いに答えなさい。なお、出題の都合上、表記を変えたところがある。

※句読点や記号も一字分とする

【文章Ⅰ】

覚えたことをいつでも忘れない抜群の記憶力——。そんな能力を手にしたら、今度は状況が変化したときに以前の記憶が邪魔をして新しい環境へのA順応ができなくなる。そんなデータが『サイエンス』誌で発表されました。欧州神経科学研究所のディーン博士らがネズミを使って示した研究です。

記憶はシナプス（神経細胞間の結合部）の重みの空間に蓄えられます。ア、特定の神経細胞が強く結びつくことが記憶の実体です。結合が徐々に弱まると、記憶が褪せてゆき、いずれ思い出せなくなります。これが忘却です。

忘却は、シナプスの経年劣化ではなく、神経伝達物質のアンテナ分子（受容体）がシナプスから除去される積極的な現象で、正常な生理機能として脳に備わっています。ディーン博士らは受容体が除去される分子メカニズムを突き止め、そこに必要な分子の遺伝子を削除しました。シナプスの強度が弱화しない脳を持つネズミの誕生です。予想通り、このネズミは忘却できませんでした。

一度覚えたなら忘れない——羨ましいと思いきや、さまざまな不都合が見えてきます。たとえば、給餌所が変わると、新しいエサ場を覚えることができたものの、以前のエサ場を忘れることができず、相変わらず探してしまいます。過去と現在の区別がつかないのです。

私たちが時の流れを感じるのは記憶があるからです。過去と現在の様子を比べることで、時々刻々と変化する世界を感じることができます。B過去の記憶がなければ、当然ながら心の時間は流れません。イ 先の実験は逆に、記憶が強固すぎてもやはり時間が凍てついてしまうことを意味しています。過去が新鮮すぎたら、それは現在と同じです。記憶が色褪せるからこそ、情報に遠近感が生じ、私たちの心の中に「現在」という瞬間が立ち現れるのです。

なるほど、私のようにすぐにC忘れてしまう脳も悪くないようです。

【文章Ⅱ】

集中力を鍛える方法はないだろうか——プリンストン大学のターク・ブラウン博士らは、そんな試みを真剣に行っています。彼らの実験データから、いくつか有益なD示唆が得られます。『ネイチャー神経科学』に掲載された論文はとくに興味深いものがあります。

一般に注意力は「低頻度に出現するアイテムを検出する能力」で測定します。たとえば、風景や動物の写真が次々と出てくる画面を眺めながら、ボタン

を押す作業をやってもらいます。風景が出たらボタンを押し、動物だったら押さないというルールを課すのですが、動物の写真の出現率を風景の10分の1に設定すると、動物が現れたときにも、ついボタンを押してしまいます。このミスの回数を測定すれば、その人の集中力がわかります。

集中力は個人差が大きく、長時間にわたって注意を維持できる人もいれば、すぐに注意力が散漫になってしまう人もいます。では、集中力の足りない場合、これを向上させるにはどのようにしたらよいのでしょうか。

タール・ブラウ博士らは、脳の活動を記録しながら、集中力が落ちてきたら、識別の難しい写真を出し、課題の難易度を高めました。逆に、集中力が上がったら問題の難易度を下げました。こうしたトレーニングをしばらく続けると、その後、集中力を保つのが上手になるのです。集中するためのコツを掴むのでしよう。いずれにせよ集中力が鍛えられるのは嬉しい知らせです。

E 重要なポイントがあります。集中力が切れてきたら、普通の発想ならば、より簡単に集中力を要しない課題へと切り換えて対処することでしょう。ところが博士らは逆に、難しい問題に変えました。あえて集中力を要求することで、集中力を再活性化したのです。

集中力は、消費することで、枯渇してしまう減価資源ではなく、掘れば自ずと噴き出す湧泉なのです。

【文章Ⅲ】

商品を選択するとき、何を基準にし、どれほど時間を掛けて選ぶでしょう。

選択根拠の一つは「好みの一貫性」とされます。

ウ

、高価な絵画を買うとき、部屋に飾って何年も飽きないことが重要です。これは流行の変遷の速いファッション界でも同様で、仮に来年は着られなかったとしても、今シーズン中は好んで着続けられるデザインを選ぶでしょう。

F 好みの一貫性は何に由来するのでしょうか。「じつくりと思慮するから選択がブレない」と考えるのが一般的でしょう。ところが最近の心理研究によれば、どうもそうではないらしいのです。ラドバウド大学ナイメーヘンのデクスタハウシュ博士らの研究を紹介しましょう。

博士らは、いくつかの巧妙な実験を行ない、熟慮すると好みが一定せず、むしろG嗜好（しやう）がブレることを示しました。さらに博士は、もともと熟考する傾向のある人は好みが一貫しない傾向があり、瞬時に判断する人は好みが安定していることも示しています。とくに考慮すべき項目が多い複雑な選択になるほど、両者の差は顕著になります。

この延長で行われたハーバード大学のランド博士らの実験が、さらに示唆に富んでいます。手渡された金をどれほど寄付するかを観察したところ、寄付金額の決定が速い人は寄付率が高かったのです。逆に熟慮するタイプは自分の利益を優先する傾向がありました。興味深いことに、判断の遅い人でも、迅

速に判断してもらえように促すと、寄付率が高まりました。

X 的に決断すると、好みが一定し、しかも他人に利する行動を取る。一方、一步踏み留まって考えると、自分の内なる声に正直でなくなり、しかも**Y** 的になる。

なるほど。今年は即断即決。直感で生きることを目指そうではありませんか。

問一 傍線部A「順応」、D「示唆」、G「嗜好」の語句について、本文中での意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

A「順応」

- | | | | |
|---|------------------|---|-----------------|
| 1 | 言うことや決まりに素直に従うこと | 2 | 適切な処置をおこなうこと |
| 3 | 順を追って物事に取り組むこと | 4 | 周囲の変化に合わせて変わること |

D「示唆」

- | | | | |
|---|-------------------|---|---------------|
| 1 | 情報を視覚的に表して明確に示すこと | 2 | それとなく示して教えること |
| 3 | 物事に自然と心が惹かれること | 4 | 次の物事を指でさし示すこと |
| 5 | 機転が利いて行動が素早いこと | | |

G「嗜好」

- | | | | |
|---|------------------|---|----------------------|
| 1 | 物質を区別して認識する感覚のこと | 2 | 行為を行うために必要とされる条件のこと |
| 3 | 特定の物事に対して持つ好みのこと | 4 | 詳しく知りたいという積極的な気持ちのこと |
| 5 | 非常に苦手で受け入れがたいこと | | |

問二 空欄 **ア** **ウ** にあてはまる語句として最も適当なものを、次の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。ただし、同じ番号を二回以上使うことはできない。

- | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|------|---|------|---|-----|
| 1 | 決して | 2 | つまり | 3 | たとえば | 4 | なぜなら | 5 | しかし |
|---|-----|---|-----|---|------|---|------|---|-----|

問三 傍線部B「過去の記憶」とあるが、ネズミの実験における「過去の記憶」とは何か。本文中から抜き出して答えなさい。

問四 傍線部C「忘れてしまう」のは、脳のどのような現象によるものか。それを説明した部分を本文中から抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

問五 傍線部E「重要なポイント」とは何か。【文章Ⅱ】の語句を用いて三十五字以内で説明しなさい。

問六 傍線部F「好みの一貫性は何に由来する」のかについて、本文中で述べられている最近の研究とはどのようなものか。最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- 1 一般的に考えれば、じつくりと熟慮すればするほど、決して選択はブレないということ
- 2 複数の候補から即断即決しようとする慌ててしまうため、ミスが多くなるということ
- 3 項目が多い複雑な選択において瞬時に判断できる人は、好みが安定しているということ
- 4 判断の遅い人は、手渡された金を寄付するときには、常に寄付率が高くなるということ
- 5 熟慮するタイプは、自分の利益とともに、他者のために行動することが多いということ

問七 空欄X・Yにあてはまる語句として最も適当なものを、次の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

- | | | | | |
|------|------|------|------|------|
| 1 具体 | 2 感情 | 3 利己 | 4 打算 | 5 直感 |
|------|------|------|------|------|

問八 生徒たちが【文章Ⅰ】～【文章Ⅲ】について話し合いをしている。生徒の発言のうち本文の内容に合わないものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- 1 Aさん——【文章Ⅰ】は記憶力についての文章で、記憶することだけではなく忘却することもあるのだとわかりました。
- 2 Bさん——【文章Ⅰ】は記憶の脳の働きの文章で、神経細胞の結合の強弱が記憶に密接に関係していることがわかりました。
- 3 Cさん——【文章Ⅱ】は集中力についての文章で、実験のミスの回数を測定することでその人の集中力がわかるとわかりました。
- 4 Dさん——【文章Ⅲ】は決断力についての文章で、瞬時の判断と熟慮の判断では好みの一貫性は変わらないことをわかりました。
- 5 Eさん——【文章Ⅰ】～【文章Ⅲ】は脳の働きについての文章で、常に新たな脳科学の研究が進んでいることがわかりました。

二、次の文章は夏目漱石『永日小品』の「山鳥」(一九〇九年発表)である。これを読み、後の問いに答えなさい。なお、出題の都合上、表記を変えたところがある。

※句読点や記号も一字分とする

五六人寄つて、火鉢を囲みながら話をしていると、突然一人の青年が来た。名も聞かず、会った事もない、全く未知の男である。紹介状も携えずに、取次を通じて、面会を求めるので、座敷へ招いたら、青年は大勢いる所へ、一羽の山鳥を提げて這入つて来た。初対面の挨拶が済むと、その山鳥を座の真中に出して、国から届きましたからといって、それを当座の贈物にした。

その日は寒い日であつた。すぐ、みんなで山鳥の※¹羹を拵えて食つた。山鳥を※²料する時、青年は袴ながら、台所へ立つて、自分で毛を引いて、肉を割いて、骨をことごとく敲いてくれた。青年は小作りの面長な質で、蒼白い額の下に、度の高そうな眼鏡を光らしていた。最も著るしく見えたのは、彼の近眼よりも、彼の薄黒い口髭よりも、彼の穿いていた袴であつた。彼はこの袴の上に両手を載せて、自分は※³南部のものだと云つた。

青年は一週間程経つて又来た。今度は自分の作つた原稿を携えていた。余り佳く出来ていなかったから、遠慮なくその旨を話すと、書き直してみましよう云つて持つて帰つた。帰つてから一週間の後、又原稿を懷にして来た。斯様にして彼は来る度ごとに、書いたものを何か置いて行かない事はなかつた。中には三冊続きの大作さえあつた。然しそれは最も不出来なものであつた。自分は彼の手に成つたもののうちで、最も傑れたと思われるのを、一二度雑誌へ周旋した事がある。けれども、それは、ただ編集者の御情けで誌上にあらわれただけで、一銭の稿料にもならなかつたらしい。自分が彼の生活難を耳にしたのはこの時である。彼はこれから文を売つてA口を糊する積だと云つていた。

或時妙なものを持つて来てくれた。菊の花を乾して、薄い海苔の様に一枚一枚に堅めたものである。精進の疊、鯛だと云つて、居合せた※⁴甲子が、早速浸しものに湯がいて、箸を下しながら、酒を飲んだ。それから、鈴蘭の造花を一枝持つて来てくれた事もある。妹が拵らえたんだと云つて、指の股で、枝の心になっている針金をぐるぐる回転させていた。妹と一所に家を持つてゐる事はこの時始めて知つた。兄妹して薪屋の二階を一間借りて、妹は毎日※⁵刺繡の稽古に通つてゐるのだそうである。その次来た時には※⁶御納戸の結び目に、白い蝶を刺繡した襟飾りを、新聞紙にくるんだまま、もし御掛けなさるなら上げましよう云つて置いて行つた。それを安野が私に下さいと云つて取つて帰つた。

そのほか彼は時々来た。来る度に自分の国の景色やら、習慣やら、伝説やら、古めかしい祭礼の模様やら、色々の事を話した。彼の父は漢学者である云う事も話した。※⁷篆刻が旨いという事も話した。御祖母さんはさる大名の御屋敷に奉公していた。申の年の生れだったそうだ。大変殿様の御氣に入りで、猿に縁んだものを時々下さつた。その中に※⁸峯山の画いた手長猿の幅がある。今度持つて来て御覧に入れましよう云つた。青年はそれぎり来なくなつた。すると春が過ぎて、夏になって、この青年の事も何時か忘れる様になつた或日、——その日は日に遠い座敷の真中に、※⁹単衣を唯一枚つけて、じつと書

見をしていてさえ堪えがたい程に暑かった。——彼は突然遣つて来た。

相変らず例の派出な袴を穿いて、蒼白い額に煮染んだ汗をこくめいに手拭で拭いている。少し瘠せたようだ。甚だ申し兼ねたが金を貳拾円貸して下さい。実は友人が急病に罹ったから、早速病院へ入れたのだが、差し当り困るのは金で、色々奔走もしてみたが、ちよつと出来ない。已を得ず上がったと説明した。

自分は書見をやめて、青年の顔をじつと見た。彼は例の如く両手を膝の上に正しく置いたまま、どうぞと低い声で云った。あなたの友人の家はそれ程貧しいのかと聞き返したら、いやそうではない、ただ遠方で急の間に合わないから御願をする、二週間経てば、国から届く筈だからその時はすぐと御返しするという答である。自分は金の調達を引き受けた。その時彼は風呂敷包の中から一幅の懸物を取り出して、これが先達で御話をした華山の軸ですと云つて、紙表装の※₁₀半切ものを展べて見せた。旨いのか不味いのか判然とは解らなかつた。印譜をしらべてみると、渡辺華山にも※₁₁横山華山にも似寄つた※₁₂落款がない。青年はこれを置いて行きますと云うから、それには及ばないと辞退したが、聞かずに預けて行つた。翌日又金を取りに来た。Bそれつきり音沙汰がない。約束の二週間が来ても影も形も見せなかつた。自分は欺されたのかも知れないと思つた。猿の軸は壁へ懸けたまま秋になつた。

裕を着て気の緊まる時分に、長塚が例の如く金を借してくれと云つて来た。自分はそう度々借すのが厭であつた。不図例の青年の事を思い出して、こう云う金があるが、もし、それを君が取りに行く気なら取りに行け、取れたら貸してやろうと云うと、長塚は頭を掻いて、少し逡巡していたが、やがて思い切つたとみえて、行きましたようと答えた。それから、先達ての金をこの者に渡してくれろという手紙を書いて、それに猿の懸物を添えて、長塚に持たせてやつた。

長塚はあくる日又車でやつて来た。来るや否や懷から手紙を出したから、受け取つて見ると昨日自分の書いたものである。Cまだ封が切らずにある。行かなかつたのかと聞くと、長塚は額に八の字を寄せて、行つたんですけれども、到底駄目です、惨澹たるものです、汚ない所です、妻君が刺繍をしていましてね、本人が病気でしてね、——金の事なんぞ云い出せる訳のものじゃないんだから、決して御心配には及びませんと安心させて、掛物だけ帰して来ましてと云う。自分はへええ、そうかと少し驚ろいた。

翌る日、青年から、どうもD嘘言を吐いて済まなかつた、軸は慥かに受取つたと云う端書が来た。自分はその端書を他の信書と一所に重ねて、乱箱の中に入れた。そうして、又青年の事を忘れる様になつた。

そのうち冬が来た。例の如く忙しい正月を迎えた。客の来ない隙間を見て、仕事をしていると、下女が油紙に包んだ小包を持って来た。どさりと音のする丸いものである。差出人の名前は、忘れていた、いつぞやの青年である。油紙を解いて新聞紙を剥ぐと、中から一羽の山鳥が出た。手紙が付いている。その後色々の事情があつて、今国へ帰っている。御恩借の金子は三月頃上京の節是非御返しをする積りだとある。手紙は山鳥の血で堅まつて容易に剥れなかつ

た。

その日は又木曜で、若い人の集まる晩であつた。自分は又五六人と共に、大きな食卓を囲んで、山鳥の羹を食つた。そうして、派出な小倉の袴を着けた蒼白い青年の成功を祈つた。五六人の帰つたあとで、自分はこの青年に礼状を書いた。そのなかにE先年の金子の件御介意に及ばずと云う一句を添えた。

※1 羹……肉や野菜を煮た熱い料理。

※2 料……料理する。

※3 南部……青森県南部、岩手県北・中部などを指す地域名。

※4 甲子……某氏。ある人の意味。

※5 刺繍……着物、特に留袖などの模様付けに用いられる技法の一つ。

※6 御納戸……ねずみがかつた藍色。

※7 篆刻……石や木などの印材に文字を刻むこと。

※8 崙山……渡辺崙山。江戸時代後期の武士・画家。（二七九三年～一八四一年）

※9 単衣……裏地をつけずに仕立てた薄手の着物。

※10 半切もの……掛け軸のサイズの一つで縦長のもの。

※11 横山華山……江戸時代後期の絵師。（二七八一？年～一八三七年）

※12 落款……書画が完成したとき、作者が署名または押印すること。

問一 傍線部A「口を糊する」の本文中の意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- 1 内職をする
- 2 誰にも話さない
- 3 勉強をする
- 4 注目される
- 5 何とか生活していく

問二 傍線部B「それっきり音沙汰がない」とあるが、「自分」はこの状況をどのように捉えたのか。最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- 1 「青年」は、借りたお金を返すつもりがなく、そのまま逃げてしまった
- 2 「青年」は、病気になってしまい借金も返せないため、連絡ができなくなった
- 3 「青年」は、田舎に帰ってしまったので、来る事が出来なくなってしまった
- 4 「青年」は、借金返済のためにあちこち駆け回っていたので、忙しかった
- 5 「青年」は、これまでの嘘の発覚を恐れて、訪問できなくなってしまった

問三 傍線部C「まだ封が切らずにある」のはなぜだと考えられるか。その理由として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- 1 「長塚」は、来るや否や懷から手紙を出したので、封を切る暇がなかったから
- 2 「長塚」は、一幅の手長猿の懸物だけを届けにいけないと考えていたから
- 3 「長塚」は、青年に手紙を渡したものの相手が読まずにそのまま返してきたから
- 4 「長塚」は、青年が病気で借金の取り立てができず、手紙を渡せなかったから
- 5 「長塚」は、思いがけず一羽の山鳥を青年からいただいたしまったから

問四 傍線部D「嘘言」の内容は何か。適当なものを、次の1～5のうちからすべて選びなさい。

- 1 小説家を目指していること
- 2 兄妹で暮らしていること
- 3 友人が病気だということ
- 4 結婚を機に故郷に戻ることに
- 5 南部出身だということ

問五 傍線部E「先年の金子の件御介意に及ばず」が指し示す内容を、三十五字以内で説明しなさい。

問六 右の文章には次の一文が抜けている。挿入するのに最も適当な箇所の直後の五字を抜き出して答えなさい。

それは小倉織で、普通の学生には見出し得べからざる程に、太い縞柄の派出なものであった。

問七 登場人物「自分」の人物像として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- 1 若い人に囲まれてちやほやされながら、親からの遺産でゆつたりと優雅に暮らしている人物
- 2 小説家として若い弟子たちの指導をしながら、困っている人を見るとつい助けてしまう人物
- 3 特に仕事もなく、お金に困った人に高利で貸し付けて、借金の取り立てで生活している人物
- 4 美術品や骨董品を預かって、貧しい人にお金を貸し付けるといふ商売をしている人物
- 5 田舎から都会へ出て来る若者の夢をかなえるための支援をする裕福な生活をしている人物

三、次の傍線部について、漢字はひらがなで読みを答え、カタカナは漢字にしろ。

- | | | |
|---------------------|-------------------|--------------------|
| ① 厳かな態度で場を引き締めた | ② 新しい制度について概ね理解した | ③ 荒廃した建物が並ぶ |
| ④ 多くの人の犠牲の上に平和は築かれた | ⑤ 古い伝統を継承し、伝えていく | ⑥ 夕方には空がクレナイに染まる |
| ⑦ 災害のキケン性が高い | ⑧ 彼に対するギネンが晴れない | ⑨ この問題は、彼にユダねるしかない |
| ⑩ イサギヨク負けを認める | | |

四、次の文章は、江戸時代に向井去来が、松尾芭蕉からの伝聞、蕉門での論議、俳諧の心構え等をまとめた俳諧論書『去来抄』である。これを読み、後の問いに答えなさい。なお、出題の都合上、表記を変えたところがある。

※句読点や記号も一字分とする

X ※1 此木戸このきどや錠ぢやうのさされて冬の月 ※2 其角きかく

※3 『猿蓑』撰の時、この句を書き送り、A下を「冬の月」「霜の月」、置き煩わづらひ侍るよし、聞きここゆ。B然しかるに、初めは文字つまりて「柴戸しばのど」と読みたり。

※4 先師曰く「※5角がC「冬」「霜」に煩わづらふべき句にもあらず」とて、「冬の月」と入集にじしせり。

その後、大津より先師のD文に「柴戸しばのど」にあらず、「此木戸このきど」なり。かかる秀逸は一句も大切なれば、たとへ出板しゅつばんに及ぶとも、いそぎ改むべし」となり。

※6 凡兆曰く「E「柴戸」「此木戸」、させる勝劣なし」。

※7 去来曰く「この月を柴の戸に寄せて見れば、尋常の気色なり。是を城門じやうもんにうつして見侍れば、Fその風情あはれに物すごく、いふばかりなし。角がG「冬」

「霜」に煩わづらひけるもことわりなり」。

※1 此木戸や錠のさされて冬の月……この城門は鍵がかけられていて通れない。空を見上げると、澄んだ冬の月が輝いている。

※2 其角……宝井其角。芭蕉の高弟。

※3 『猿蓑』……向井去来と野沢凡兆が編集した俳諧撰集。

※4 先師……松尾芭蕉。江戸時代前期の俳諧師。（一六四四年～一六九四年）

※5 角が「冬」「霜」に煩わづらふべき句にもあらず……其角ほどの作者が置き迷うほどの句ではない。

※6 凡兆……野沢凡兆。芭蕉の高弟。（？年～一七一四年）

※7 去来……向井去来。芭蕉の高弟。（一六五一年～一七〇四年）

問一 本文中の俳句X「此木戸や錠のさされて冬の月」は何句切れか。最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選びなさい。

- 1 初句切れ 2 二句切れ 3 中間切れ 4 句切れなし

問二 其角が、傍線部A「下を『冬の月』『霜の月』、置き煩ひ侍るよし、聞こゆ」と相談したのに対し、先師は傍線部C『冬』『霜』に煩ふべき句にもあらず」と返答したのには先師の勘違いがある。その勘違いとは何か。最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- 1 「冬」も「霜」も大きな違いはないという勘違い
- 2 「錠のさされて」を「鍵のさされて」と読んでしまった勘違い
- 3 「此木戸」を「柴戸」と読んでしまったという勘違い
- 4 「冬の月」を「霜の月」と読んでしまったという勘違い
- 5 「柴戸」を「此木戸」と読んでしまったという勘違い

問三 傍線部B「然るに」、D「文」の本文中での意味として最も適当なものを、次の1～4のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

- | | | | | |
|--------|-------|--------|-----------|----------|
| B「然るに」 | 1 やはり | 2 ところが | 3 いつものように | 4 それにしても |
| D「文」 | 1 来訪 | 2 教訓 | 3 手紙 | 4 遺言 |

問四 凡兆が、傍線部E『柴戸』『此木戸』、させる勝劣なし」と述べたのに対し、去来は、傍線部G『冬』『霜』に煩ひけるもことわりなり」と述べている。二人の見解の相違について説明したものとして最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- 1 凡兆は「柴戸」と「此木戸」に違いはないとしたが、去来は「柴戸」は立派な門であるのに対し「此木戸」は粗末な門なので迷うのは当然であるとした。
- 2 凡兆は「柴戸」と「此木戸」に違いはないとしたが、去来は「柴戸」は温かな感じであるのに対し「此木戸」は冷たい感じなので迷うことはないとした。
- 3 凡兆は「柴戸」と「此木戸」に違いはないとしたが、去来は「柴戸」は普通の城門であるのに対し「此木戸」は価値のない城門なのでつまらないとした。
- 4 凡兆は「柴戸」と「此木戸」に違いはないとしたが、去来は「柴戸」は非日常の景色であるのに対し「此木戸」は寂しい景色なので迷うのは仕方がないとした。
- 5 凡兆は「柴戸」と「此木戸」に違いはないとしたが、去来は「柴戸」はありふれた情景であるのに対し「此木戸」は趣きある城門なので迷うのももつともだとした。

問五 傍線部F「その風情あはれに」をすべてひらがなの現代仮名遣いに直しなさい。

問六 其角が詩句を創作する時の思いは、どのような思いだと考えられるか。二十字以上三十字以内で説明しなさい。

問七 『去来抄』と同時代に成立した作品を、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|-------|---|--------|---|--------|---|--------|---|--------|
| 1 | 『羅生門』 | 2 | 『みだれ髪』 | 3 | 『日本書紀』 | 4 | 『雨月物語』 | 5 | 『源氏物語』 |
|---|-------|---|--------|---|--------|---|--------|---|--------|